

2020年3月29日

聖書 ルカによる福音書23章44～49節

説教 「わたしの霊を御手にゆだねます」

藤井清邦牧師

23:44 既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。45 太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。47 百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言っ  
て、神を賛美した。48 見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。49 イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。」

#### ◆教会の祈り

神様、今わたしたちは、あなたの助けを求めて、あなたの慰めを求めて御前にぬかづいています。あなたが恵み深い方であり、何時如何なる時にも、わたしたちの逃れ場、避けどころでいて下さるからです。世界は、いまだかつて経験したことが無いような苦しみの中に置かれ、2万8千人とも言われるあまりにも多くの命が失われ、更に多くの人々がいのちの戦いをなしています。人間の限界を思わされ、その無力さを思わされます。わたしたちはあまりにも傲慢であり、人間には何でもできるかのように思い込んでいました。すべての病気が治るものであるかのように、解決の手立てはわたしたちのもとにあり、人間の力や技術によってこの世界がコントロールできるかのように思っていました。しかしそうではありませんでした。生きることの行き詰まりを覚える人々がおられ、幼い子どもたちから、年老いた者まで、あらゆる人々が困難の中にあります。人々の健康がおびやかされ、生活が、仕事が、社会全体が、まるで土台から揺さぶられているようです。何より、わたしたち人間の心がこの病を前にしてその根底から揺さぶられているようでもあります。ですから、どうか、わたしたちが疲れ、意気消沈してしまふことがありませんように。試みの中であなたへの信仰を失ってしまうことがないようにしてください。御言葉に約束して下さったとおり「神、われらと共にいます」ということを、そして、あなたは「耐えられないような試練に遭わせることはなさらず」「逃れる道をも備えていてくださる」ことを、堅く信じさせてください。

いつくしみ深い神よ、世を去ったすべての人々を憐れんでください。多くの闘病中の人々に希望と癒しを与えて下さい。世界のあらゆるところで困難の中に置かれたすべての人と共にいてください。日々の暮らし、生活と仕事を守ってください。主の教会と、教会につらなるすべての人々を守り支えて下さい。

わたしたちは今、「神は愛」であることのゆえに感謝いたします。このことにおいて、わたしたちは今、豊かな慰めを与えられ、希望を与えられ、生きる力を与えられます。どうか今週の歩みも、復活のキリストに導かれ、それぞれに与えられた十字架を担ってあなたに従う者とさせてください。わたしたちの主、イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

#### ◆説教

先月2月26日に、教会では「灰の水曜日」の祈祷会が行われました。その頃から、東京でもコロナウイルスの拡がり具体的に感じられるようになりました。3月に入ってからは、聖ヶ丘教会でも、感染防止のために様々な取り組みをし、制限を設けて歩いて参りました。この一か月は、世界中がそうでありましたし、私たちの教会にとっても本当に大きな痛みであり、試みの時でした。しかし同時に、私たちは、日曜日の礼拝が、これほどにも私たちにとってかけがえのない大切なものであったのだということを深く思わされています。今は、確かに「試練の時」であるに違いありませんが、今、私たちは、かつてないほど、礼拝を捧げるといふこと、教会につながるということについて考えさせられるように思います。

このような時、皆さんと共に心に留めたいことがあります。それは、教会や礼拝というものが、一体何のためにあるのかということです。

主イエス様は、礼拝、つまり安息日が誰のためにあるのかということをお教えされたとき、「安息日は、人のために定められた。」(マルコ2:27)と言われ「人が安息日のためにあるのではない。」と言われました。つまり「礼拝」は、神様が私たちのために与えて下さった恵みです。私たちが生きていくために、礼拝という大きな恵みが与えられています。どんな命でも、「日ごとの糧」を得なければ生きることができません。同じように、私たちは「神様からの糧」を、礼拝を通して受けてきました。礼拝を通して、私たちに慰めが与えられ、生きる力が与えられます。このことが何を表しているのかといいますと、それはわたしたちの命の肯定です。神様がわたしたちの生きることを望んでおられ、神様がわたしたちの命を守る方であるということです。

一方では、礼拝のためには命を投げ捨てる覚悟が必要だという考えもあります。それはある部分はそうした面があるかもしれませんが、それがすべてではありません。たとえばペトロが主の受難を前にして「**主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております**」(ルカ 22:33)と言いました。しかし、聖書はそのペトロの覚悟を讃えて、わたしたちもこのペトロのような決意を持つべきだとは語りません。そこにおいて讃えられたのはペトロの決意や覚悟ではなく、ペトロのために命を差し出してくださったキリストであり、ペトロを救い出してくださった主の愛です。

わたしたちの信仰において礼拝は何よりもたいせつなものです。そして礼拝のために全力を注ぎます。しかし忘れてはならないのは、わたしたちが何のために礼拝に全力を注いでいるのかということです。礼拝を通して主が示そうとしておられる主の御心を受け止めて歩みたいと思います。繰り返しになりますが、礼拝も、福音も、そして教会の存在というものも、それはわたしたちが生きるということのために神様が与えて下さったものであることを覚えたいと思います。

さて、今日の礼拝ではルカによる福音書 23 章 44 節からの御言葉がひられています。そこには十字架にかかり、いよいよその最後の時を迎えようとしておられる主イエス様の姿が記されています。改めて、聖書の御言葉に目を向けたいと思います。「**23:44 既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。45 太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」**こう言って息を引き取られた。」

ここには、昼の 12 時頃、あたり一面が闇に覆われ、太陽は光を失ったと記されています。ここにある「全地の闇」や「太陽が光を失った有様」は、単なる情景描写ではありません。この「闇」や「光が失われた光景」の中には、わたしたち人間を取り囲み、呑み込もうとしている深い闇が見つめられています。創世記のはじめの部分、創世記 1 章を見ますと、神様が創造の御業をなさる前の世界は、まさに闇に覆われた世界であったことが記されています。同じ旧約聖書のヨブ記には「死の闇」ということが語られています。預言者イザヤも、わたしたちの世界を取り巻く深い闇の存在を語ります。この闇の中には、人間の生きることを妨げる力や、人間の命を呑み込もうとする悪しき力が見つめられています。罪の闇ということが語られます。そして死という深い闇が横たわっています。主イエス様の十字架を覆っていたのは、その

ような闇です。この暗く不気味な闇と、光が失われた姿の中には、今ここに生きる私たちを取り囲んでいる様々な暗さ、その闇が示されています。

この闇に覆われた世界に、主の御言葉が大声で響きわたります。46 節です。「**父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。**」ここに主の福音の絶大な力が示されます。そしてこの主イエスの言葉とその出来事から、百人隊長の神への賛美が湧き起こってきます。

主イエス様は自らの命の終わりにおいて「**父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。**」と祈られました。死というのは、わたしたちの手立てがすべて尽きてしまうことです。もうわたしたちがこれ以上、何もすることが出来ないということ、それが死ということです。しかし主イエス様は、そのような人間の手の業が尽きてしまい、もはや何もできなくなるというわたしたち人間の姿をすべてその身に引き受けて下さり、そしてあの十字架の上で「**父よ、わたしの霊を御手にゆだねます**」と祈られたのです。父である神様に、わたしたちを委ねるという生き方があります。そこにわたしたちの慰めがあるということを示してくださいました。

わたしたちはあまりにも自分の力に頼りすぎてきたのではないのでしょうか。わたしたちの世界もまたこの世の力、人間の能力や力がまるで全能であるかのように思っていたのではないのでしょうか。しかし、本当の力強さ、救いというのは、十字架の上に主イエス様が示してくださった「**父よ、わたしの霊を御手にゆだねます**」というみ言葉において知ることができます。わたしたちが最後に委ねることができる場所、それは父である神様の御手です。わたしたちの終わりは死と冷たい土の中に身を任せることではありません。わたしたちを愛し、救いを望んでくださる神の御手に委ねるのです。ですから、わたしたちは無限の虚しさの中に放り出されるわけではありません。キリストは「**父よ、わたしの霊を御手にゆだねます**」と祈って息を引き取られたと記されされます。そのすべては父である神様の御手の中に受け止められるのです。わたしたちもそうです。私たちが暗闇の中に放り出されたかに思えるとき、わたしたちの存在を、すべてその御手の中に引き受けて下さる神様がおられるのです。そこに、私たちは委ねて良いのです。わたしたちのすべてを引き受けて下さる方は、父である神様です。この神様の御手こそが、主イエスを死者の中から命へと導き出された御手であり、私たちが命へと導き出してくださる救いの御手なのです。